



東西しらかわ小学校長会 広報部

第 5 号 令和2年 7月 1日
発行人 会長 菊池 篤志

新しい時代の夜明け ～発想の転換を～

東西しらかわ小学校長会長 菊池 篤志
(白河市立白河第一小学校長)

現在、コロナ禍の中で「新しい生活様式」が求められ、常に3密対策を念頭に置いた生活を余儀なくされています。しかし、「このような生活に追いやられている」と考えるのか、「新しい考えで新生活をスタートできる」と考えるのかは心の持ちよう大きく変わってきます。

私たちは、9年前、東日本大震災を経験しました。震災後の状態をどう抜け出したら良いのか途方に暮れていた時期がありましたが、程なく新しい生活に切り替え、様々なアイデアを産みだし、ピンチをチャンスに変えてきたのです。その経験から学んだことが、今回のコロナ禍の中でも活かされていると思います。この大変な中ですが、何となく、「打開できる」「発想を変えてプラスの方向に」と考えることができるのは、東日本大震災後のすさまじい体験があったからこそではないかと思えるのです。

本紙「南至」は、現白河市教育委員会芳賀祐司教育長が小学校長会長のときに命名したものです。「南至」とは、「冬至」と同義語で、太陽が軌道上の最も南に来るときのことで、夜が最も長く、昼が短い日を指します。この日を境に、今まで衰えていた太陽の力が次の日から再び勢いを増していくことになり、新しい年の始まりを意味するものでもあります。まさしく、コロナ禍という

暗黒の状況から明るい未来に向けてスタートすることを意味しているようです。

何か課題があったり大きな壁にぶつかったりしたときに、打開策はやはり「発想の転換」です。今回のコロナ禍の中で、働き方改革の今後の進め方については、大きなヒントがありました。今まで超過勤務をしてきたことが、今回のことで本当に必要なものは何なのか考えることができたのです。学校行事や対外的な行事等も、中止や延期になりましたが、今後の行事のあり方について、じっくり考えるチャンスをいただいたとも言えます。子どもたちに必要な資質を育て、その行事の目的を果たすための手段は、今までのやり方ではなくてもできるのではないかと、ということです。今までの思考を一端白紙に戻し、改めて考え直すというぐらいの発想の転換が必要なのではないのでしょうか。その際、教育の本質はそぎ落とすことがないように考えていくことは、もちろん当然のことです。新しいアイデアで、充実した学校経営ができるよう工夫していきたいものです。是非、良いアイデアは校長会で共有し、県南の学校が、児童が、教職員がより良い方向に進んでいけるよう頑張っていきましょう。そして、県南に留めることなく、全県に広めていきたいものです。

「指南」という言葉があります。「史書」に記載があり、伝説の皇帝である黄帝が、敵の人工的に霧を起こして目くらましをした作戦に対峙する際、常に南を向く「指南車」をつくらせ、方向を示させました。このことが語源となっています。その後、常に南を指す「指南」車のことが、「教え導くこと」という意味となったのです。

福島県の県南は最も南に位置する地区です。どうしても県北や県中が中心のように考えられがちですが、教育界では、県南が全県をリードするタグボートのような役割を果たしていけるのではないかと思います。発想を転換し、旧来のシステムを根本から考え直し、効率的で効果の高い教育を推進していくことができれば、他地区の先生方は「県南に倣(なら)え」「県南を目指せ」となるでしょう。それこそが「指南」であります。

「南至」と「指南」、この2つの言葉は、これからの東西しらかわ小学校長会を更に発展させていくための方向性を示した言葉だと思います。会員みんなで一丸となって進めていましょう。

輝きを増すために

白河市立白河第二小学校長 井上久仁夫

4月6日、教員になって初めての校庭での着任式。引き続き行われた始業式では季節外れの雪。

「校長が南会津から連れてきたのでは・・・」と囁かれながらも何とか担任発表まで終了。そんな中でも整然と並び、教職員に注意される姿もなく、しっかりとした態度で話を聞く子供たち。感動を覚えるとともに、白河二小のレベルの高さを感じることができました。

私は、昭和60年4月、大学を卒業してすぐに新採用教員として本校に着任し、4年間勤務しました。当時は児童数1000名を超え、教頭先生も2人配置されていました。毎年の研究公開には500名くらいの参観者を迎え、教室に40名の子供たちと50名もの先生方が入り、めあてを書く手が震えていたことを思い出します。

学びの原点である「主体的な学習態度の育成」をテーマにした研究公開も昭和42年から今年度で38回目を迎えます。伝統に誇りを持ちながらも、よりよいものを探求し続けようとする若さ溢れる教職員の力量をさらに高めて、子供たちに還元していこうと思います。そのために校長として何ができるのかを日々考えています。

感染症の影響で先の見通しを立てることが難しい中、本校では休校期間中にカリキュラムマネジメントの研修会を開催し、合科、クロスカリキュラム、そしてカリキュラムマネジメントという視点で各学年の教育課程の見直しを行いました。各教科・領域のバランスを考え、ねらいをしっかり押さえながら、できるだけ指導内容の重複を避けることで多くの時間を生み出すことができました。全学年、少し明るい見通しを持ちながら、教育活動を再開することができました。

現状では、日常を取り戻すにはまだ時間がかかりそうですが、意欲的な子供たちと教職員という宝物がより一層輝きを増すように精一杯務めていきたいと思います。

東西しらかわ小学校長会の皆様には大変お世話になります。情報を共有しながらよりよい教育活動を進めていきたいと思います。よろしく願いいたします。

新任校長として

白河市立小田川小学校長 大内 利典

新任校長として着任し、3ヶ月が経ちました。校長室から見える景色も、まだ冬枯れの山々の木々が新緑に染まり、さらには生命の力強さを感じる深緑へと移り変わりました。

全校児童71名、教職員14名の小田川小学校は、学校全体がひとつの家族のような学校です。教職員はすべての児童の担任との自覚を持ち、全員が情報を共有し、迅速に対応することができています。子どもたちも友達のよさを分かち合っており、相手を認め、ともに学び育とうという雰囲気が醸成されています。

小田川小学校は明治22年小田川尋常小学校として設置された歴史ある学校です。夏の「親子の集い」、冬の「ひな祭り餅つき大会」などは、地域の方の協力を得ながら40年以上続いている伝統的行事だとのこと。地域の皆様も日頃から見守り活動などに積極的に協力してくださるなど、「子どもは地域の宝」という思いがひしひしと伝わってきます。校長として、これら地域・保護者の皆様の思いや願いに真摯に答えていくことの重要性和責任を強く実感しています。今年度は、新型コロナウイルス対策のため、例年実施している行事がやむなく中止、延期になっています。申し訳なく思いながら保護者に伝えると、「子どもの生命が一番ですから。」とのお言葉をいただきました。大切なお子さんをお預かりしている学校の長として、しっかりと責任を果たしていかなければとの思いを、改めて強く持ちました。

私事ですが、県南地区への赴任は初めてで、東西しらかわ校長会の諸先輩方へは大変ご迷惑をおかけしておりますが、電話での質問等にも丁寧に対応していただき、何とかここまでやってくることができました。本当にありがとうございます。

単身赴任で平日はアパートに一人暮らしですが、時間を見つけて白河市内を散策するようにしています。乙姫桜のそばに戊辰戦争の碑を見付け、苦難の歴史に思いを馳せたり、谷津田川復元水車に往時を偲んだり、日々新しい発見があります。白河のよいところを自らたくさん学んで、子どもたちにも伝えていけたらと思います。今後ともよろしく願いいたします。

「それが『創造性』というものです」

白河市立五箇小学校長 大倉 幸子

私は6年間複式学級で小学校生活を送りました。自分の学年が11人、下の学年が10人、合計21人と、かなり大所帯の複式学級でした。担任の先生が下の学年にわたっている時は、もちろん自習・・・というか、主体的・協働的に勉強を進めるしかありませんでした。

そんな中、私たちが何か工夫した活動をした時には、担任の先生はいつも、「それが『創造性』というものです」と締め括るのでした。それが学級の合言葉となり、級友同士で『創造性』を創造し、「それが『創造性』というものです。」と声を掛け合っていたような記憶があります。

あれから半世紀近くが過ぎ、この4月新任校長として五箇小学校に赴任し、新型コロナウイルス感染症対応に奔走する日々を送っています。先が見えず、決断に迷いながらも、試行錯誤で進める中、ふと蘇った「それが『創造性』というものです。」のフレーズ。

当時の担任の先生は、令和という未来に、インターネットやAIが普及し、新型コロナ禍により生活が変わることなどは、予想していたわけではないと思います。しかし、問題や困難を乗り越えていくために『創造性』が役に立つことは承知の上だったのです。「創造性を働かせる」という種を蒔いてくれた当時の先生と学校、そして育ててくれた地域には、今更ながら感謝しかありません。

これから10年先、20年先、50年先・・・どんな政治的、経済的な状況が生じるかは、誰も知ることができません。あるいは、経験したことのない災害が起きるかもしれません。それでもたくましく課題に挑み、一人ひとりが自分らしく幸せな人生を歩んでもらうために、学校は在らねばならないと考えます。

未来を創る人材を育てる・・・尊い役目を負う校長となった今こそ創造性を発揮し、目の前の子ども達が自ら問題に取り組み、乗り越え、他人と協力しながら自己実現を図っていけるよう、仕掛けを整備していこうと思います。

東西しらかわ校長会の先生方には、大変お世話になります。どうぞよろしく願いいたします。

「原点に立ち返りながら」

白河市立みさか小学校長 根本 秀一

3年ぶりに学校現場で勤務することになりました。当然、初めて勤務する学校ですので、また、前職で、学校で起きる様々な出来事にかかわってきたことから、日々、子どもたちや先生方とともにいる喜びを味わいながらも、いつも何か起きるかもしれないという言い知れない不安を感じて過ごしています。今回の新型コロナウイルス感染症がなければ、授業参観や運動会を始め多くの営みが繰り広げられ、活躍する子どもや課題を持った子どもを自然に理解し、また、地域の方々と接する機会もあり、今ほどの不安を感じることはなかったかもしれません。先生方と言葉を交わし、教室訪問をし、子どもたちの様子を見て、聴く毎日です。

創立24年を迎えるみさか小学校は、各地で子ども見守り隊が結成された当時、その手本ともなった、地域活動が盛んな学校で、読み聞かせを始めとする地域ボランティアの方々に支えられ、地域と一体となって教育活動を展開してきた学校です。先日は、学区内にある企業から、事務所近くに設置した自動販売機の売り上げが一定の金額に達したので、是非PTA活動に役立ててほしいとのお話がありました。正に地域とともに歩んでいる学校です。これまで23年間、歴代の校長先生方と職員の皆さんが、子どもたちはもちろん、保護者、地域の方々の信頼を得、創り上げてきたものであることを考えると、責任の重さに身が引き締まる思いです。

一方で、特別な、しかも手厚い支援を必要とする子どもが多く、校長室は、それらの子どもたちの最後のクールダウンの場所、という役割も担っています。

気がつけば残り2年となりました。校長は、自ら判断しその責任を負います。子どもを中心に据えて判断するにしても、迷うことも多々あると思います。これまでの先輩方のご指導や同僚の先生方の姿勢、出会ってきたたくさんの子どものことを思い出し、また、原点となる教員になった思いに立ち返りながら、校長会の皆様と手を携えて、自らの力を発揮することができるよう努めていきたいと考えています。

「温故知新」

初心不可忘

白河市立釜子小学校長 仁科 英俊

4月1日初めての出勤！

「温故知新」と彫られた石碑が目に入ってきました。本校の創立100周年の記念碑でした。



創立100周年を迎えたのは昭和49年、今から46年前になります。昭和49年頃の時代背景としては、教育界では「高度経済成長後の経済・社会活動の複雑・高度化に伴い必要とされた知識量の増大を、学校の質を上げることで対応する」とされ、学習指導要領の改訂により教育内容の増大及び現代化が進められていました。また、スポーツ界では長嶋茂雄氏現役引退、芸能界では故志村けん氏ザ・ドリフターズ正式加入などが挙げられます。この時代背景の中で、どうして「温故知新」という熟語を彫ることにしたのかは明らかではありませんが、明治7年5月に創立され、明治26年には現在地に新校舎が新築されたという、歴史ある学校。「歴史をもう一度見つめ考え、そして新しい時代に向けての学びを充実させる！」というメッセージだったのではないかと考えました。

平成17年には合併で白河市になり、令和元年7月には校舎新築・改築の落成式典開催と、時の流れとともに変化を遂げてきました。

そして、今年。新型コロナウイルス感染症の影響で、教育活動の中止・延期、実施と判断を迫られることが多くあります。授業時数の確保と学びの保障は？水泳指導は？運動会は？学習発表会は？そんな時に、脈々と繋がってきた本校の歴史を見つめ直しながら、「学校における新しい生活様式」や現在の状況を正しく把握し、判断していきたいと考えています。

これまで歴代34名の校長先生方も、それぞれの時代背景の中で、いろいろな判断や決断に迫られることがたくさんあったことでしょう。その時で、悩み苦しみ、それでも目の前にいる子ども達のことを第一に考え、釜子小学校の伝統と校風を見つめ直しながらここまで繋がって来たのだと思います。私もその中の一人として、「温故知新」を大切にしながら頑張っていきます。

白河市立信夫第一小学校長 金子 秀則

「お帰りなさい。」「待ってたよ。」

4月の総会の折に、校長先生方からたくさんの温かいお言葉をいただきました。久しぶりに県南の学校現場に戻った懐かしさと、育てていただいた先輩方とまた一緒にお仕事をする事ができるうれしさで、思わず胸が熱くなりました。

そんな令和2年度の始まりに、私の心に浮かんだ言葉は、やはり「初心不可忘（しょしんわするべからず）」。世阿弥が記した「花鏡」にある、その3つの意味を思い出しました。

まずは、「是非の初心忘るべからず」。以前の“非”を知ることが以後の“是”となる、とのこと。「初めの新鮮な気持ちを忘れるな」との誤解が一般に広まっているようですが、「稽古の進歩を計る座標のために、初心の未熟な芸もとおけ」というのが世阿弥の真意のようです。新任校長の時の未熟な自分を決して忘れることなく、2校目での校長職をひたむきに務めてまいります。

次に、「時々の初心忘るべからず」。一つの初心を乗り越えた時、またすぐに新しい時点での初心と遭遇します。つまるところ、毎日が新しい初心の連続であり、果てしない初心の積み重ねが、無限の芸の可能性につながる、と世阿弥は言うのです。初めての信夫第一小学校勤務で、初めての先生方、初めての子どもたち、初めての保護者と出会いました。日々の教育活動も、新型コロナウイルス感染症への対応も、初めてのことばかりです。悩んだり迷ったりすることも多いのですが、その都度立ち止まり、一つ一つの初心を真摯に乗り越え、着実に進歩できるように努力してまいります。

最後に、「老後の初心忘るべからず」。世阿弥の時代の老後は、“50歳過ぎ”のようです。能一筋に生きて、50歳過ぎともなれば、名人であり、尊敬され、奉られることでしょう。そうした老後においてもおごることなく、老後ならではの初心を忘れてはならない、と世阿弥は説きます。私は、つい最近、50歳になったのですが、老後の初心については、定年退職後に改めてじっくり考えることにします。

どうぞよろしく願いいたします。

大屋の四季

白河市立大屋小学校長 板橋 敬史

「大屋の里を訪れて、四季折々の姿を肌で感じ、何気ない人の温かさにふれてみませんか。」

どこかの観光地のキャッチコピーのような言葉ですが、大屋小学校の校長室には、この言葉が入った額が飾られています。

少し補足をすると、その額にはこの言葉だけでなく、本校の四季を写した写真が貼られていて、季節ごとの写真一つ一つに、それぞれ次のようなコメントが添えられています。

「春 ほんのり頬そめた桜の下で生命の始まりを祝う」「夏 青葉繁る校庭で生命の熱さを感じる」

「秋 色とりどりに編みあげた大屋の里で生命をゆずる優しさを知る」「冬 一面の銀世界につつまれて生命のつながりを祈る」

そして、最後のまとめの言葉が冒頭の一節です。察するに、この額は、歴代校長のどなたかが、大屋小の四季折々の素晴らしい景色と、そこで営まれる子どもたち活動を目にした時に感じた思いを言葉と写真で表したのだなと。そして、こうしたものを創りたい(残したい)ほど、大屋小学校を愛していたのだなと。

着任して間もない私は、まだ「桜の下の子どもたち」と「青葉繁る校庭の子どもたち」しか見ていませんが、それでもこの言葉の意味がなんとなくわかる気がします。なぜなら、私が本校に着任して早々に感じたのが、なんとも言えない懐かしさと居心地のよさであり、桜や新緑といった自然の美しさだったからです。さらに初めて入る校舎、初めて会う子どもたちなのに、学校の中に入っても、また、子どもたちとふれ合っても、全く違和感を感じません。これまでずっとこの学校にいたかのように安心して過ごすことができていることに不思議な感覚を覚えています。初めて訪れた地域、学校でなぜそう感じたのかはわかりませんが、同じような感覚を歴代の校長先生方も持たれていたのではないのでしょうか。

統合を2年後に控え、本校最後の校長となるかもしれないかもしれませんが、自分の役目を常に自問自答し、歴代の校長先生方がなされてきたように、じっくりと子どもと向き合い、そして育て、地域に貢献できる学校を創っていきたくと思っています。

「成長」のモニュメント

西郷村立熊倉小学校長 渡邊 康一

20年ぶりに熊倉小学校に勤務することになりました。当時は、ミニバスケットボールの指導と花いっぱいコンクールに向けた園芸作業を頑張っていたことが鮮明に思い起こされます。そして、当時の教え子やお世話になった地域の皆様との再会を楽しみに赴任しました。

4月に赴任してまず目にしたのは、「成長」のモニュメントです。私が平成8年に着任したときに、新校舎落成とともに創立120周年記念(ゆずり葉運動)で、公募により制作したモニュメントです。そして、そのモニュメントの「成長」が今年度のめざす学校像となっています。

しかし、新型コロナウイルス感染症拡大防止により、学校は4月22日より臨時休校となり、5月18日より段階的に教育活動を再開することとなりました。学校が再開され、改めて実感したのが、「学校に子ども達の笑顔があふれ、教室から元気な声が聞こえてくる。」これが学校であり、子ども達と学校生活を送れる有難味を実感しました。学校が始まれば、毎日いろいろなことが起きますが、それでも学校は楽しいところです。

このような中、これからの予測困難な時代に学校としてどのように立ち向かい、新たな発想で教育活動を進めていくために「学校デザインプロジェクトチーム」を立ち上げました。また、学校と地域の協働連携も不可欠な時代であり、「地域連携協働チーム」が中心となり、地域の教育力をさらに学校に取り入れていくようにしました。勿論、多忙化解消もあり、いくつかの委員会もスクラップしました。これからは、組織をさらに生かし、教職員の英知を結集していきたいと思っています。

コロナ感染症防止対策は、これからも続き見えない部分もありますが、この状況下で「人間万事塞翁が馬」という格言を思い出します。これからますます予測不可能な社会になっていく中、周囲の状況に振り回されることなく、めざす学校像である成長のモニュメントとともに、歩み続けていきたいと思っています。どうぞよろしくお祈りいたします。



「拓魂精神」を胸に新たな挑戦へ

西郷村立川谷小学校長 佐藤 仁一

今から27年前、私は川谷中学校で教員生活をスタートさせました。当時、新採用教員として、この校舎で初任者研修を行い、多くの先生方にお世話になったことを思い出します。そして何よりも、川谷の子ども達や保護者、地域の方との楽しい思い出は今でも鮮明に覚えています。

そして今年4月、その川谷小・中学校に新任校長として着任しました。校長室の窓からは当時と変わらぬ景色が広がり、まるで故郷に帰ってきたような不思議な気持ちになりました。

4月のある日、校長室に3つの贈り物が届きました。1つ目は、川谷で初めて担任をした生徒たちからの贈り物です。それを見たとき、当時の緊張した出会いや初めて卒業させたときの感動がよみがえり、教師のやりがいや子どもの成長に関わる喜びを学ばせてもらったことに、改めて感謝の気持ちでいっぱいになりました。2つ目は、川谷で一緒に勤務した先生からの手紙です。その先生は、授業のことや学級経営のことなど、教師としての基本を教えてくださいました。手紙を読み終えた時、その先生の背中を今日までずっと追いつけ、自分が今ここにいることを実感しました。3つ目は、川谷小学校の子どもたちから届いた手紙です。手紙には、「頑張ってください。応援しています。」と心のこもったメッセージが書いてありました。毎日、期待と不安が入り交じる中、その手紙は私に勇気をくれました。川谷の子ども達が、私の背中を強く押してくれたのです。

ここ川谷は私の教員生活の原点であると同時に校長としての新たな挑戦の地となりました。3つの贈り物は、私を育ててくれた皆様への感謝の思いと、持てる力全てを川谷での学校経営に注ぎたいという思いをより一層強くさせてくれるものでした。当時の子ども達は今では保護者に、当時の保護者は今は地域の応援団として協力いただいています。昔と変わらぬ川谷の「拓魂精神」を胸に刻み、目の前の子ども達のために全力で学校経営に取り組む決意です。校長会の先輩方から多くのことを学び、「川谷ならではの」と言える特色ある学校づくりに努力してまいりますので、よろしくお願いいたします。

縁と恩、関わりの中で生きる

棚倉町立棚倉小学校長 鈴木 雅人

今回の異動で、三度目の棚倉小学校勤務となる。一度目は、昭和61年4月から5ヶ月、二度目は平成12年から4年間、そして今回である。

昭和61年は、今でいうフリーターの後初めて講師として教壇に立った年である。当時2年生担任の先生が産休に入り、その補充教員としての振り出しである。後に、その産休に入られた先生とは私が教頭時代、校長時代、二度もご一緒したのも何かの縁である。

二度目の平成12年は、表郷村（現白河市）教育委員会に派遣社会教育主事として勤務した後の異動であった。異動したその年に5年生を担当し久々の担任の喜びをかみしめたものである。しかし、その喜びも束の間、翌年から教務主任となりそれ以来担任はせずに教頭となった。つまり、この棚倉小学校は最後に担任をした学校であり、教諭として最後に過ごした学校でもある。

そして、今回校長としての赴任である。多分私の年齢からすると最後（人事は何が起こるか分からないが・・・）の学校になるであろう。そう考えると、最初の教え子、最後の担任、最後の教諭としての勤務、教職最後の学校、と棚倉小学校は私の教職人生にとって節目の学校で、深い縁がある。さらには、私と同一校での勤務が二度目の職員や以前の学校の保護者としての関わりのある職員も多数おり、職員との出会いにも縁がある。まさに今、私は縁の中に生きている。

今回の異動で、自分が縁の中で生かされ、その縁によって如何に恩を受けてきたかを再認識している。少し前までは、「退職したら携帯電話を破棄して俗世間との縁を切り、山にこもり自給自足で暮らしたい。」などと戯けた多少非現実的な思いをもっていたが、何と浅はかだったことか。

校長室のとある生命保険会社の日めくりカレンダーに「与えた恩は忘れろ、受けた恩は忘れるな。」という言葉が書いてある。まさにそのとおりで思う。受けた恩に報いるためにも棚倉小学校の子どもたち、職員が充実した日々を送ることのできる学校を創りたい。人は縁の中で生き、恩を受けて育つのである。縁を粗末にしてはならない。恩を忘れてはならない。そう更に思う日々である。

道

山岡小学校児童の新たな出発のために

棚倉町立社川小学校長 坪井 浩一

棚倉町立山岡小学校長 嘉成 靖

臨時休業期間中の高校入試、そして卒業式。修了式は実施しない。異例の対応が続く中、棚倉町立社川小学校へ異動となりました。二度目の小学校勤務ですが、今度は立場が違います。校長経験のない私には経験に裏打ちされた部分が欠けています。「よりよい対応をするためには、知識や経験に裏付けされた判断が必要である」という言葉が何度も脳裏をよぎりました。この短い期間にも棚倉町教育長様を始め、町内の校長先生方から多くのご助言をいただき、感謝・感謝の毎日でした。

また、学校給食や音楽教育など、未経験な分野も担当することになりました。校長会の総会は開かれたものの、その後の会は全て中止となってしまいました。お会いしてお願いすべき内容も電話が中心となりましたが、依頼された校長先生方は皆明るく張りのある声で「了解しました」「喜んで」などと答えてくださり、私の不安は一掃されました。ほっと一息つきながら、「向山行雄全連小顧問代表祝辞(要旨)」を思い出しました。一部を引用します。

「小学校時報 No.803」(H30.7)

【向山行雄全連小顧問代表祝辞から是非とも部分を抜粋】

- ・ 校長先生方には、是非とも世界に冠たる我が国の初等教育のよさを再認識していただき、「変わらぬもの」のよさを価値付けていただくとともに「変えるべきもの」を見極めて取り組んでいただきたい。
- ・ 校長先生方には、是非とも学校経営の志を高く掲げていただきたい。

志とは、「夢と希望と目標」であります。学校の理想を高く掲げる、その道を示す、そこに課題が生じれば、橋を架ける、崖を削るなどして道筋を整備する。

古今東西、これがリーダーの真の役割です。

令和2年度の教育課程も大幅な変更を余儀なくされることになりました。そのような状況下においても「志」を失わず「夢と希望と目標」を示される校長先生方に囲まれ「人が最大の環境である」との思いを一層強くいたしました。地域の実態に目を向け、耳を傾け、諸先輩の皆様を手本としながら、東西しらかわの子どもたちのために微力を尽くしてまいりたいと思います。そしていつの日か「自分も通った道だから・・・」と笑顔で語れるような校長になりたいものだと思っております。これからも、どうぞよろしくお願いたします。

校舎の周りでは、野鳥がさえずり、様々な花が咲き、虫が飛び交う。校舎は森の中にあるレストランを思わせるようなモダンな建物。休み時間になると「校長先生遊びましょう。」と、男の子が誘いに来る。校長も遊びのメンバーの一人。

6月の棚倉町議会で、山岡小学校146年の歴史に幕を下ろすことが決まりました。いよいよ棚倉小学校への統合と本校の閉校への歯車が回り始めた事を感じました。

1年間の教育活動を通して、「児童が夢や希望を持ち、棚倉小学校・棚倉中学校へ進級・進学し、一人一人が意欲をもって学校生活を送ることができる」児童の育成を目指します。そして、将来地域の支えとなる児童が、地域と共に新しい未来へ希望をもち、明るい気持ちで歩んでいけるよう「山岡小学校新しい未来へのプロジェクト」を進めていきます。

子どもたちに夢や希望をもたせるためのツールの1つにキャリア教育があります。昨年度私は、「PDCAノート」を活用して教職員の多忙化感の解消の研究を行い、成果を得ることができました。この「PDCAサイクル」を児童に身に付けることで、学校生活に達成感を味わわせることができます。そして将来、PDCAサイクルの見方、考え方で仕事や生活を見つめることができれば、夢や希望をもって生きていけると考えています。これがPDCAサイクルに基づいたキャリア教育です。早速、6月から始まる棚倉小学校との交流活動でPDCAカードを使い始めました。目標をもって棚倉小学校との交流活動を行い、その活動を振り返り、次の目標を設定するというサイクルを繰り返します。このカードを他の活動でも繰り返し使うことで、PDCAサイクルの見方、考え方を児童一人一人に身に付けることができます。

令和3年4月「棚倉小学校・棚倉中学校へ進級・進学した山岡小学校の児童が意欲をもって学校生活を送ることができる。そして、将来、山岡の地域の支えになっている。」このことを願い、この1年間の教育活動に取り組んでいきます。

東西しらかわ小学校長会の皆様、どうぞよろしくお願いたします。

「教師の信条」と「学校の信条」

目指すもの

埴町立笹原小学校長 兼子 知久

鮫川村立鮫川小学校長 齋藤 雅彦

『教師の信条』

- 一 心身ともに健康な教師
- 二 子どもとともに伸びる教師
- 三 子どもとともに遊べる教師
- 四 自立性に富み責任感の旺盛な教師
- 五 お互いに敬愛し協力のできる教師
- 六 合理的、能率的に仕事のできる教師

本校職員室の正面の壁に、大きな額縁に納められた『教師の信条』というものを掲げています。それはそれは素晴らしい達筆の書で、歴代の校長先生が、その想いを伝えようと筆を執られたものと察しております。以来本校に在籍された先生方が心に留め、教育活動に当たられてきたかと思うと、この言葉の重みを痛感せずにはられません。

この『教師の信条』は、めまぐるしい勢いで変化し続ける昨今の環境の中においても、どの時代においても、あるべき教師像として捉えることができ、機会あるごとに先生方と確認し、振り返りの場、教育活動のあり方を考えるものにしていきます。当然のことではありますが、この教師の姿であれば、教育活動は充実し、子どもたちの健やかな成長をより育むことができます。そして、自ずと学校全体も組織も活性化していくものとして、先生方で共有するようにしています。

僭越ながら、私としては、この信条の「教師」の部分「学校」という言葉に置き換えて、学校運営に当たるようにしています。

『学校の信条』

- 一 心身ともに健康な「学校」
- 二 子どもとともに伸びる「学校」
- 三 子どもとともに遊べる「学校」
- 四 自立性に富み責任感の旺盛な「学校」
- 五 お互いに敬愛し協力のできる「学校」
- 六 合理的、能率的に仕事のできる「学校」

新任校長の私としては身が引き締まる思いです。先生方にはこの教師像を目指し、更に力をつけていけるような環境を構築すること、そして、学校全体・組織をより強固なものにすることが校長の役割と新たに決意しました。この「信条」を胸に刻み、あるべき『学校像』を確立していきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

6年ぶりに、再び鮫川小学校に勤務させていただくことになりました。東日本大震災後、約3年間勤務させていただいた鮫川小学校には、新緑の山々を背景に校庭の桜が満開に咲き誇る以前と変わらない景色がありました。着任後、改めて鮫川小学校の沿革をたどってみると、明治時代の鮫川村の収入に占める教育費の割合は、最高で75パーセントとかなり高いものでした。教育にかける先人の強い思いを感じたところです。

森の案内人による、カタクリ群生地での植物の学習や朝日山を登りながらの動物の生態の学習。田植えや稲刈りなどの体験と関連させながら、田んぼの生き物や植物の生命力の素晴らしさを教えてくれる特別非常勤講師。低学年の体力向上推進のために、運動教室に協力してくださるトレーニングセンターの職員の方々。学校教育に協力してくださるたくさんの方々にお世話になりながら、地域に根ざした教育活動を進めているところです。これらの多様な体験活動が特色でもある本校の教育活動において、私自身が目指していきたいものがあります。

初任者の時、ある教育事務所の管理主事より、教師という仕事はどんな仕事かと問われました。私は学習指導や生徒指導のことを答えたのかも知れませんが、きっとありきたりの内容であったと思います。そして、管理主事からはこんな言葉をいただきました。

「あなたの仕事は、まず子どもたちの命を守ることです。次に、子どもたちが独り立ちできるように教師として関わっていくことです。」

これからもこの言葉を大事にしていきたいと思っています。命を守る環境づくりと児童の安全・安心に関する意識を高める指導とは。知識や技能を教えるだけではなく、一人一人が独り立ちした時に必要とされる資質や能力を身につけさせる指導とは。本校の教育活動一つ一つを、この二つの視点で検討しながら進めていきたいと思っています。

今年度の本校の重点目標は、「自立と自律」です。私自身の未熟さを常に振り返りながら、鮫川小学校の職員と一緒に「やがて独り立ちできる児童」の育成を目指していきたくと思っています。